

## 71 歯科医史学と色彩学の関連性の考察

陶 粟 嫻・西 卷 明 彦

演者らは、日本歯科医史学会雑誌二十三巻一号「医療史料として見る吉備大臣入唐絵巻」で、色彩学的な考察を行った。今回、色彩学を医療史料の分析に応用する可能性について考察を試みた。

色彩については、アリストテレス以来、ゲーテらによりさまざまな論考が試みられている。色彩学として成立したのは十九世紀で、色彩の三原色説、それに対立する補色説が代表的な考え方として挙げられている。

医療史料と色彩学の関連として、赤という色彩は、枕草子に「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、少しあかりて」というように、太陽の赤が、生命の営みの根源であると言われている。また、火の色、血の色もこのように赤と生命が密接な関連があると考えられている。民俗信仰で有名な「だるまさん」は、関東一帯の養

蚕農家では蚕が眠りから覚めることを「起き上がる」といい、マユの形がダルマに似ていることに因む表現だったと言われている。その「ダルマ」に塗る赤は、赤色か橙色で、庶民の信仰物は古くから魔除け、厄除けとして赤がもてはやされ、特に「赤絵」といわれる治療絵は、疱瘡除けとして有名である。このように、医療史料に色彩学を応用することは、民族の情念の分析に一石を投じる可能性を示唆している。

歯科医史的に考えると、江戸時代既婚の女性は、歯を黒く染めるお歯黒が一般的であった。このように歯を黒く染める「お歯黒文化」は、太平洋沿岸、インド洋沿岸にみられるという。しかし、日本において明治元年一月六日の大政官令に「公卿の涅槃点眉古制に非ざるを以て必ずしも循守せざるを命す」と布告され、さらに明治三年二月五日の大政官令で、「華族自今元服の輩。歯を染め眉を掃候儀停止被御候事」と出された。この後、お歯黒の風習はしだいに消えていくが、明治時代は一般的であった。この明治時代に、歯に金冠を装着する方法が、一般に行われ始めるようになった。金は、古代文明にお

いて世界各地でさまざまに使用され、この美しさは多くの人を魅了した。金はそのかがやきと色彩を比較的長く保つことから、永遠・不死のイメージを生み、権力のシンボルとしても結びついた。日本においても、弥生時代の福岡市東区志賀島出土の『金印』、五世紀頃の『金製勾玉』など、金を権力のシンボルとして使用する例は、かなり早くから存在していた。明治時代、西洋歯科医師の導入により、金冠、金箔修復などが行なわれるようになってからは、権力のシンボルとして、口腔内に金を入れることが一般化してきた。歯科理工学的には合金金の性質が、適合可能な機械的性質を有し、化学的に安定で、耐食性にすぐれていることが口腔内で合金金を使用する根拠であるが、一般にはあまり理解されていない。

しかし、現代では合金金を使った修復法は、そのニーズは少なくなり、硬質レジンジャケット冠や、ポーセラージャケット冠のように本来個人がもつ天然歯の色調傾向を求めるニーズが強まっている。これは、近年のナチュラル思考と何らかの関係性を有していると考えられる。このように、日本人の女性の歯に関する意識は、黒↓金

↓白と、わずか一〇〇年の間に大きく変化している。中国においては、「お歯黒」の風習は少なく、また金に対するニーズも少なかったという。このような変化は、色彩的にどのような意味をもつのか、今回、考察を試みた。

(日本歯科大学新潟歯学部医の博物館)